

Causal Chain の観点からみた非典型的な 他動詞文

——デ格を伴う他動詞文を中心に——

劉 劍

キーワード：causal chain、単一事象、複雑事象、介在文、状態変化主体の他動詞文

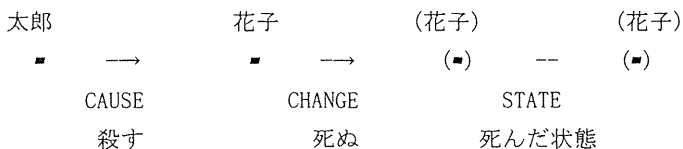
要 旨

本論文は、デ格とガ格を中心に、典型的な他動詞文からはみ出してしまう現象を causal chain というアプローチを用いて分析するものである。非典型的な他動詞文は複雑事象を表す他動詞文であると提案し、この提案を用いて介在文、状態変化主体の他動詞文などの現象を統一的に説明した。

1. はじめに

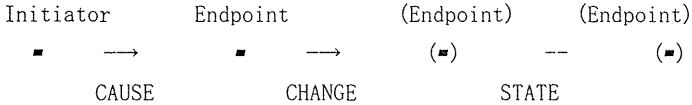
典型的な他動詞文は、「太郎が花子を殺した」のような「主体が客体に働きかける」「対象が変化を被る」ものであると言われている (Croft1991、角田 1991 等)。Croft の一連の研究は、causal chain という事象モデルを用いて、典型的な他動詞文を分析している。具体的には、ある事象の各参与者 (participants) の間の力の伝達・移動 (force dynamic) で、各参与者が一つの chain に結ばれ、causal chain になる。「太郎が花子を殺した」を例にして説明すると、事象の参与者は「太郎」と「花子」である。「殺す」という力が、太郎から、花子に伝達・移動し、花子はその力を受けて、変化を被る。図で表示すると、(1) のようになる。

(1) 太郎が花子を殺した。



力の発するもの、つまり、causal chain の開始点を initiator とし、力を受けるもの、つまり、causal chain の終止点を endpoint とすると、(1) を (2) のように抽象化することができる。この抽象化は典型的な他動詞事象のモデル化でもある。

(2) Idealized Cognitive Model of a Simple Event:



(Croft 1994: 37)

(2)における点(■)は参加者のことを指し、矢印(→)は力の伝達・移動関係 (relationship of transmission of force) を表す。二つの参加者を組み合わせると、節 (segment) になる。非矢印の直線(--) は非使役関係 (noncausal (stative) relation) を表す。() に入っている点 ((■)) は、当参加者は前の節における参加者と変わらないことを表す。

Croft によると、(2)をはじめ、causal chain には、以下の四つのフィーチャーがある。

(3)

- a. a simple event [i.e. what is named by the verb] is a (not necessarily atomic) segment of the causal network;
- b. simple events are nonbranching causal chains;
- c. a simple event involves transmission of force;
- d. transmission of force is asymmetric, with distinct participants as initiator and endpoint.

(Croft 1991: 173)

また、Croft (1991) によると、causal chain は意味構造を決めるものであるため、参加者は causal chain のどこに位置するかはとても重要である。参加者は、causal chain 上の位置によって、その意味役割が決まる。力を発するものは、つまり、causal chain の開始位置にあるものは、通常、動作主体 (agent) である。力を受けるもの、つまり、causal chain の終止位置にあるものは、通常、動作客体 (patient) であ

る。以上は典型的な他動詞事象の場合であるが、典型から離れた他動詞文にも、causal chain が当てはまる。たとえば、事象に動作主体が存在しない場合、経験者が動作主体の代わりに、causal chain の開始位置にある。つまり、causal chain の initiator になる ((5))。経験者も存在しなければ、原因が initiator になる ((6))。さらに、原因も存在しなければ、道具が initiator になる ((7))。causal chain という考え方の利点は、統語構造の主語にリンクするのは、事象構造の initiator であると統一的にまとめられることである^{*1}。したがって、意味構造と統語構造のリンク問題への解決案の一つとして、非常に重要な意味を持つ。

(4) 太郎は花子を殺した。(動作主体)

(5) ジョンは、思わず窓に手をつけて、窓を壊してしまった。(経験者)

(天野1987:153)

(6) 父の死が花子の運命を変えた。(原因)

(天野1987:151)

(7) 小石が蟻の巣穴をふせいだ。(道具)

(田川2004:9)

2. 日本語における「例外」現象とデ格

1節の causal chain の観点からみると、若干の例外があるにもかかわらず、英語のほとんどの他動詞文を解釈することができる。つまり、事象構造における initiator は、統語構造の主語にリンクする。

しかし、causal chain というアプローチを日本語の他動詞文に当てはめてみると、解釈できる場合もあれば、解釈できない場合もある。たとえば、先に挙げた (4) ~ (7) は、causal chain に当てはまる例である。つまり、(4) ~ (7) の例文の主語は、その文の表す事象の initiator である。一方、以下の (8) ~ (10) は、causal chain に当てはまらない。

*1 田川 (2004) は、主語にリンクする意味役割は動作主であり、動作主の決定的な意味素性は「動因性」であると主張している。田川の主張は、本論文の causal chain の観点からまとめられた結論とは、かなり類似している。

(8) 太郎は美容室で髪を切った。

(9) 私たちは空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。

(天野 1987 : 109)

(10) この番組は、御覧のスポンサーの提供でお送りします。

2.1. 介在文

(8) の表す事象を力の伝達・移動の観点から分析すると、「太郎」から「美容師」に依頼するという働きかけがまずあり、一種の力が「太郎」から、「美容師」に伝達・移動する。そして、「美容師」は「太郎の髪」に「切る」という働きかけをする。「切る」という力を発するのは「美容師」である。(8) の事象を表すために、英語では、「Taro had/got his hair cut」のような「have 構文」を使うのが普通である。この文の表す事象は、単一事象ではなく、複雑事象である。英語では、単一動詞は単一事象を表す。複雑事象を表すために、「have 構文」という迂言形式が必要である。「cut」という単一動詞を述語にする場合は、やはり単一事象を表さなければならない。したがって、単一事象の initiator 「美容師」を主語にしなければならない。「The hairdresser cut Taro's hair」。

(8) における「切る」は単一動詞である。「切らせる」や「切ってもら」などの迂言形式ではない。仮に、英語と同じく、単一動詞は単一事象を表すと考えれば、「切る」という単一動詞を述語にする (8) は、「美容師は (太郎の) 髪を切る」という単一事象を表すはずである。したがって、その事象構造の initiator は「美容師」のはずである。このように、「切る」は「cut」と同じように単一事象を表すが、一方で「切る」は「cut」と異なり、単一事象だけではなく、複雑事象を表すこともできる。「太郎は美容室で髪を切った」という単一動詞文は、単一事象ではなく、複雑事象を表すのである。「切る」という単一動詞の形式を取るにもかかわらず、意味的に、「依頼 (have)」と「切る (cut)」という二つの働きかけが含まれている。言い換えれば、日本語は、迂言的な形式を使わず、単一動詞「切る」は、「cut」とともに、「have」の意味的特徴も同時に含んでいる。

英語では、迂言的な形式である have 構文になると、単一事象の initiator (old initiator) が文に現れなくてもよい。「Taro had his hair cut」。日本語では、英語と同じく、単一事象の initiator の「美容師」は統語に出てこない。しかし、英語と異なるのは、「美容師」に関連する「美容室」がデ格を伴って、統語に現れることである。ここのデ格は、場所デ格と思われるかもしれないが、英語の in the barber のような単純場所とは異なる。たとえば、

- (11) 地元の工務店で家を建てた。
- (12) 知り合いの修理屋さんで車を直した。

以上の (11) (12) のデ格は、ガ格と置き換えられる。

- (11)' 地元の工務店が家を建てた。
- (12)' 知り合いの修理屋さんが車を直した。

(8) におけるデ格はガ格に置き換えられないが、(11) と (12) におけるデ格と類似する性質を示すと思われる。

また、以上の他動詞文におけるデ格句を取り除くと、ガ格名詞は動作主として解釈できる。しかし、デ格句をつけると、動作主としての解釈ができないわけではないが、動作主ではなく、使役主として解釈するのが普通だと思われる。

- (13) 太郎は髪を切った。(切るのは太郎か美容師か)
- (14) 太郎は美容室で髪を切った。(切るのは美容師)

2.2. 状態変化主体の他動詞文

(9) の表す事象を力の伝達・移動の観点から分析すると、力を発するのは、「空襲」である。空襲から家財道具に力が伝達・移動した。言い換えれば、空襲が家財道具に働きかける。そして、家財道具は変化を被る。したがって、単一事象の causal chain 上の initiator は「空襲」のはずである。(9) の事象を表すために、英語では、「The air raid destroyed our house」のような文を使うのが普通である。事象構造の initiator、「the air raid(空襲)」は、統語構造の主語にリンクしている。しかし、英語と異なり、日本語文の (9) では、事象構造の initiator、「空襲」は、統語構造の主語にリンクしていない。「空襲」は、統語構造でデ格を伴って現れている。

また (9) をはじめとする他動詞文は、状態変化主体の他動詞文と呼ばれている。(天野：1987) 状態変化主体の他動詞文は、また以下のような例がある。

- (15) 勇二は教師に殴られて前歯を折った。

(天野 2002 : 122)

(16) 気の毒にも、田中さんは昨日の台風で屋根を飛ばしたそうだ。

(天野 2002 : 122)

状態変化主体の他動詞文の特徴は、主体（私たち、勇二、田中さん）がまったく働きかけをしておらず、すなわち、主体はその事態の引き起こし手ではないことであり、主体の身にその事態が降りかかってきたという点である。

この構文の成立条件の研究として、天野の他に児玉（1989）がある。児玉（1989）では、天野が指摘しなかった「デ格の重要性」という要因について以下のような例文をあげ、「ガ格名詞が動きの引き起こし手でなくなるためには、主体とは別に直接的な事態の引き起こし手が必要なのである」と述べている。

(17) 伯母は丹精こめた菊の花を枯らした。

(児玉 1989 : 71)

(18) 伯母は丹精こめた菊の花を霜で枯らした。

(児玉 1989 : 72)

(17) は意図的に水をあげずに枯らしたという解釈もでき、非意図的に水をあげ忘れて枯らしてしまったという解釈もできる。いずれにせよ、「伯母」は引き起こし手であると解釈される。一方、(18) のように「霜で」をつけると、「伯母」は引き起こし手と解釈できなくなり、状態変化主としか解釈できない。

児玉の指摘には、状態変化主体の他動詞文の成立に関して、デ格が大きく関わっていることが示唆される。デ格名詞は、主体と別に直接的な事態の引き起こし手であるという点では、上記の causal chain の観点から考察した結果と重なっている。

2.3. 更なる現象

(10) の表す事象を力の伝達・移動の観点から分析すると、「スポンサー」が資金などの援助を、テレビ局に提供するため、「スポンサー」と「テレビ局」は、causal chain の一つの節になる。つまり、スポンサーからテレビ局まで、力の伝達・移動が発生し、その後、「テレビ局」は、「番組」へ「送る」という働きかけをする。したがって、causal chain 上の initiator はスポンサーのはずである。(10) の事象を表すために、英語では、「This part of the program is (was) brought to you by P&G(sponsor)」のような文を使うのが普通である。P&G というスポンサーは文の

主語ではないが、もともと主語にリンクされ、受動文を構成するため、by phrase に格下げしたと解釈できる。英語と異なり、日本語文の(10)では、事象構造の initiator である。空襲は、統語構造の主語にリンクしていない。統語構造では、事象構造の initiator の「スポンサー」は、デ格を伴っている。しかも、「の提供」という力を暗示する名詞句を伴っている。

2.4. 本節のまとめ

以上の三つの他動詞文には、共通するところがある。それは、単一事象の initiator は、主語にリンクせず、何らかの形式変換（美容師 → 美容室；スポンサー → スポンサーの提供）で、デ格にリンクするという点である。

1節で明らかにしたように、causal chain の initiator は統語構造の主語にリンクするというルールがある。この観点からみると、日本語における「initiator → デ格」というリンクの仕方は、ルール違反、つまり、例外のように見える。次節では、この現象は本当に例外なのかを検討する。

3. Causal chain の観点からの分析

2節では、(8) (9) (10) の三つの他動詞文は、単一事象の initiator が、統語構造の主語ではなく、デ格に関連する名詞句にリンクすることを明らかにした。一方、統語構造における主語と文の関係との観点から見ても、これらの他動詞文は、典型的な他動詞文から離れたものであると先行研究に述べられている。これらの他動詞文の共通している特徴は、「主体が行為者（実際に手を下した人）ではない」という点である。たとえば、(8)の「切る」という動詞の行為者は、(単一事象の old initiator の)「美容師」であり、文の主語の「太郎」は実際に「切る」という動作の手を下した人ではない。(9)の「焼く」という動詞の行為者は、(単一事象の old initiator の)「空襲」であり、文の主語の「私たち」は、実際に「焼く」という動作で手を下した人ではない。先行研究では、以上のような「例外」のように見える他動詞文について、主語と述語動詞との関係を中心に論じているのがほとんどである。しかし、これらの研究は、以上の現象を「他動性」論の枠からはみ出してしまう現象であると認めながらも、その他の他動詞文との共通点をさぐる方法を取っている。したがって、該当する他動詞文の主語は、意味構造において、どの意味役割なのか、事象構造において、どの参与者なのかについての問題は、その他の他動詞文の主語と同じように、あるいは、その他の他動詞文の主語の延長線にあると

処置され、結局明らかにならなかった。

本節では、該当する他動詞文の主語は、述語動詞とどのような関係にあるのかを明らかにする。具体的には、主語にリンクするのは、意味構造での何の意味役割なのか、また、事象構造でのどの参与者なのかという問題を明らかにする。

3.1. 介在文

佐藤（1994）では、介在文においては、表す事態の意味と表現形式の間に著しい違いがあると指摘されている。表される事態の実際の過程は、以下の（19）に示すように、使役者による命令の過程（事態1）、被使役者による動詞の示す行為の過程（事態2）、および結果の達成からなると説明している。

（19）使役的状況の過程

事態1 = causing event（使役者が被使役者に対して何らかの行為をするように働きかける過程）

事態2 = caused event（被使役者が当該の行為を行う過程）

佐藤（1994：57）

「太郎が美容室で髪を切った」という文で考えると、その表す状況は依頼者である「太郎」が美容室に対して髪を切ることを依頼する過程（事態1 = causing event）と、依頼を受けた美容室の人が髪を切るという行為を行う過程（事態2 = caused event）という大きく二つの過程から構成されている。

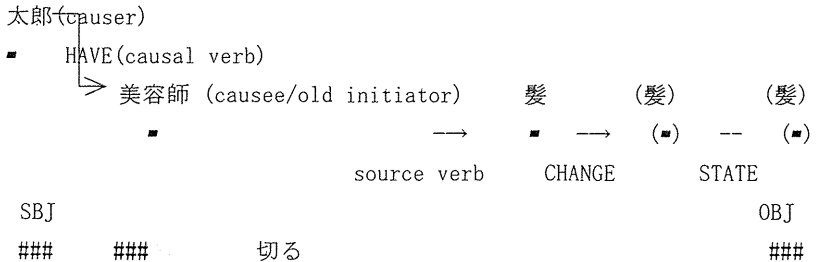
本論文では、佐藤のこのような事象の二分法は妥当であると認め、分析の第一歩として、この二分法を採用する。そして第二歩として、動詞「切る」が表す行為、つまり、事態2から分析を進める。事態2の causal chain は以下のように考える。

（20）美容師が髪を切る

美容師		髪		(髪)		(髪)
■	→	■	→	(■)	--	(■)
SBJ	CAUSE		CHANGE	STATE		OBJ
###	切る					###

ここまででは単一事象であり、動詞はこの事象の中の行為を表す。この事象（事態2）に太郎を加えると、causal chain は以下ようになる。

(21) 太郎が (美容室で) 髪を切る。



太郎が加わった causal chain は単一事象でなくなり、複雑事象になる^{*2}。したがって、全体の causal chain を曲線で表示した。「太郎」という項の導入は、「切る」という動詞には、目に見えない「have」^{*3}が潜んでいることによるものである^{*4}。

複雑事象の causal chain を見れば、「太郎」は chain 全体の initiator の位置にあることが確認できる。このように事象をとらえると、「太郎」という複雑事象の initiator が主語の位置にリンクされ、美容師という単一事象（事態2）の old initiator（実際の行為者）は causal chain の真ん中の位置にあるため、道具・手段のデ格にリンクされることも当然であると思われる。ただし、デ格への投射は、参与者のままではできず、「美容室」という組織名詞に変換してはじめて、道具・手段扱いができるようになり、デ格へのリンクもできるようになる。

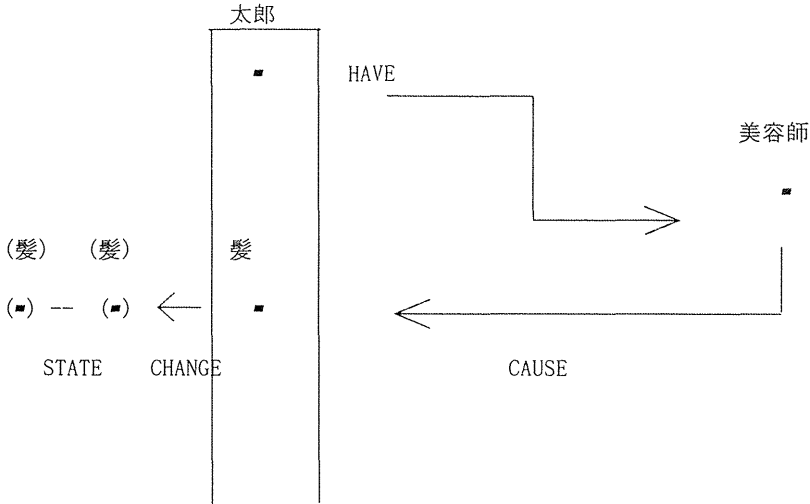
ただし、(21) の causal chain は、各参与者間の力の伝達・移動を描いたが、「髪」という参与者を太郎の一部分と考えていない。髪は太郎の一部分と考えると、(21) を以下の (22) のように改変すべきである。

(22) 太郎が (美容室で) 髪を切った。

*2 この点では、2.1 節でも触れておいた。

*3 Ritter and Rosen (1993) によると、have は語彙的意味 (lexical semantic content) を持たず、単に新しい項を統語的に導入するという機能のみを持っている

*4 「切る」は単一事象を表す際、動詞「cut」にあたり、複雑事象を表す際、構文「have~cut」に当たることは 2.1 節で触れておいた。



3.2. 状態変化主体の他動詞文

2.2節で確認したように、デ格句（「空襲で」など）が文に現れると、ガ格名詞（「私たち」など）は、状態変化主体にのみ解釈される。causal chain の観点から説明すれば、単一事象の initiator が、デ格句にリンクしたにもかかわらず、事象構造では、「空襲」がそれに当たる。事象構造の物理的な力の伝達・移動の関係は、「空襲→家財道具」の関係で、いつでも変わらない。したがって、「空襲で」というデ格句が文中に現れる (9) においては、「私たち」は、事象構造の initiator ではないため、動作主と解釈されず、状態変化主体としか解釈されない。

「私たち」は、事象構造の initiator ではない。家財道具に働きかけをしておらず、事象全体の起こし手ではない点は先行研究にも提示され、2.2節でも確認された。しかし、「私たち」は、事象とはどのような関係にあるのかは、まだ議論が続いているところである。天野（1987）では、「(主体は) <客体に起こった変化を所有する>、<ある事態を所有する>」と主張している。石田（1999）は「主体はまったく動き手としての性質を持たないとする解釈があり得るか否かについては、判断の難しい部分がある。(主体は) …抽象的な「動き」をしたと話者は見なしているのではないか、という可能性を考えねばならないであろう」と主張している。また、田川（2004）は

(23) a. [動因者] →事象

b. [被影響者]←事象

という他動詞主語と事象との関わり方のメカニズムをあげ、「状態変化主体は(23b)の[被影響者]である」と主張している。ここで挙げている先行研究では、典型的な他動詞文との共通点をさぐる方法が採られている。

本論文は、典型的でない他動詞文の主体は、典型的な他動詞文の主体との共通点をさぐる必要がないと考える。なぜならば、典型的な他動詞文は、単一事象に基づいているが、典型的でない他動詞文は、複雑事象に基づいているからであると主張する。つまり、(9)における「焼く」は、「火をつけて焼く」という動作を表す以外に、目に見えない意味要素が含意されている。当該する現象でいえば、その目に見えない要素は、「失う」ということになる。2.1節と3.1節で扱った「太郎は髪を切る」についての分析を想起されたい。「切る」には、「cut」という動作だけではなく、「have」という意味も含まれている。それと同様、「私たちは空襲で家財道具をみんな焼いてしまった」における「焼く」は、「焼く」だけではなく、「焼いて失う」、「焼いてなくす」との複合的な意味を表す。つまり、主体は「焼く」という形で家財道具を失ったと考えたい。目に見えない「失う」を lose と記し、lose によって、もともとの単一事象の「空襲が家財道具を焼いた」が、いわゆる主体の「私たち」と結びつけられ、複雑事象が作られる。図で示すと、以下のようになる。

(24) 私たちは空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。



この分析の利点は、The Causal Order Hypothesis^{*5} もうまく保持され、田川（2004）が主張した動因者動作主説もうまく保持されることである。つまり、「もともと持っているものを失う・なくす」という力は、ある種の「手放し」のような抽象的力であると認める。もともと持っている・コントロールしている状態を、ロープが張っているような状態であるとたとえると、コントロールがなくなった場合、張っているロープが切れるのと同じように、一種の力が放出される。このような力の放出は、やはり、物を失う人が起点であり、物が終点である。そのため、Croft が主張した The Causal Order Hypothesis が保持される。また、田川が主張した「被影響者」説は、「動因者動作主」説と矛盾するところがある。田川は「[動因者]と[被影響者]は両者とも外項位置に現れ、相補分布を成す」という形で、両者を統一的に説明しようとしたが、本論文の主張は、「物を失う人」そのものが動因者と認められるため、田川論文に生じた矛盾がないため、田川の「被影響者」説より説得力があると思われる。

3.3. Causal chainで説明できない現象

「この番組はご覧のスポンサーの提供でお送りします」という文は、2.3 節で述べたように、initiator がガ格ではなく、デ格に関わっているという点では、介在文、状態変化主体の他動詞文と共通している。しかし、causal order の観点から考えれば、以上の二つの文と異なる。事象構造では、

(25) スポンサー→テレビ局→番組（→観衆）

という順番ではあるものの、統語構造では、

(26) (テレビ局→) 番組→スポンサーの提供（→観衆）

という順番である。また、動詞「送る」は、「切る」「焼く」と同様に複雑事象を表す動詞と分析できない。このような現象の詳しい分析を今後の課題にしたい。

*5 The grammatical relations hierarchy SBJ<OBJ<OBJ subsequent corresponds to the order of participation in the causal chain. ... Croft (1991)

4. おわりに

本論文は、デ格とガ格を中心に、典型的な他動詞文からはみ出してしまふ現象を、causal chain というアプローチを用いて、分析を行った。そして、日本語の他動詞は、単一事象だけではなく、複雑事象をも表しうることを提案した。単一事象の initiator は主語位置（ガ格）を複雑事象の主体に譲渡し、何らかの形に変えて、デ格にリンクする。また、複雑事象の主体には、ガ格が付与される。これらの複雑事象の主体は、動詞と、働きかけの関係や引き起こしとの関係が観察されないため、先行研究においては「例外」と認められたが、causal chain で言えば、事象全体の initiator の位置にあるため、実は「例外」処置の必要がないと本論文は主張する。ただし、3.3で述べた本当の「例外」も観察されることから、それについての分析を今後の課題としたい。

参考文献

- 天野みどり（1987）「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151, 1-14
- 天野みどり（2002）『文の理解と意味の創造』笠間書院
- 石田尊（1999）「行為者解釈を持たない主語について」『筑波日本語研究』第四号, 16-41 筑波大学 文芸・言語研究科 日本語研究室
- 児玉美智子（1989）「状態変化主体他文の成立と構造」『甲子園学園短期大学紀要』9, 67-80動詞
- 佐藤琢三（1994）「他動詞表現と介在性」『日本語教育』84, 53-64.
- 佐藤琢三（1997）「「患者が注射する」一動詞の意味的焦点と事態の結果のコントロール」『言語』26（2）, 50-55.
- 佐藤琢三（1999）「動詞の自他対応と様態指定」『筑波応用言語学研究』
- 鈴木容子（2007）「日本語の他動詞文におけるデ格と主語の意味役割」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』
- 田川拓海（2004）「現代日本語における動作主の意味論と統語論」博士課程修士論文

角田大作 (1991) 「世界の言語と日本語」くろしお出版

Croft William (1991) Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information. Chicago: University of Chicago Press.

リュウ ケン／人文社会科学研究科

(2012 年 10 月 30 日 受理)